元略奪者が治安責任者に

ペシャワールから沖縄へ

中村 哲

■7

八百長の国

先日、ビザ延長手続きのため、ジャララバードの内務省・治安担当者に会って、あっと驚いた。タリバン政権崩壊直後の一年半前、私たちPMS（ペシャワール会医療サービス）が食糧配給をしていたころ、北部同盟の兵士の略奪に悩まされた。さんざん彼らとわたりあったあげくに当方が負傷者を出し、配給を中止したが、何とこの略奪者の頭目が治安を守る責任者になっているのだ。

この人物は現アフガン政府の有力閣僚、ハザラテ・アリーの直参の部下で、三十歳前後、乱暴者で聞こえた男である。おまけに、この治安担当官殿は大混乱の渦中、米軍を利用して政敵を空爆させ、ちゃっかりと政治的地位を固めた。

勝てば官軍、当方は負けた旧タリバン政権の保護下で活動していたから、意地悪な仕打ちを心配していた。だが会ってみると、案外気のいい男で、逆にお褒めの言葉をいただいた上、破格の便宜を図ってくれた。

初めはお互いに気まずい雰囲気だったから、「その折は、お世話になり…」と切り出すと、向こうも照れくさそうに「新しい仕事も結構大変で…」と話をそらし、和やかに話が進んだ。

当時の略奪の様はすさまじいもので、わが職員が守っていたPMSとデンマーク系のNGO（非政府組織）以外はすべて、国連組織、外国NGO、国際赤十字、ユニセフもみな、跡形もないくらいに見事にものがなくなった。家具はもちろん、窓ガラスまで持ち去られたところを見ると、略奪する側も相当困っていたらしい。

この一団はパシャイ部族という少数山岳民族で、北部同盟に属していた。一方、PMSのダラエ・ヌール診療所も同民族の地域にあり、干ばつ対策、医療活動の中心になっている。

この元略奪者＝現治安担当官殿に聞けば、自宅が診療所の近くだそうだ。もちろん、パシャイ族の親族がPMS職員の中にもいて、親近感をもったらしい。村の様子、最近のかんがい計画など、話が弾んだ。

きこりから身を立てた彼は、一躍成り金になって、ダラエ・ヌール下流に大きな邸宅を造っている。邸宅といっても実は長い塀に囲まれたコロニーである。一族はローガル州の山奥にいて、干ばつが厳しく生活できなくなり、PMSの水事業で潤う地域に移住させようとしているらしい。

彼が新築の家を造っている同地域は、実質的にシェイワ郡・パシュトゥン人地区自治会（ジルガ）の影響下にあるが、この場所はパシュトゥン人とパシャイ族が交ざり合う所なので、タリバン協力者だったジルガも黙認している。

主義主張よりも、血縁地縁のきずなで平和に暮らす方が重要なのだ。

今はパシュトゥン人もパシャイ人も、仲良く用水路建設に協力している。働けば日当がもらえるから、傭兵で危険な目にあったり、略奪したりせずにすむ。おまけに水がくれば、一挙両得、自分で食えるようになる。殺すのも殺されるのも、実は嫌なのである。

純粋な思想家や政治活動家にすれば、「無節操だ、八百長だ」ということになるが、主義なるものは、文字通り「食えない」。人の発明した架空のものとは次元が異なる別の原理で、人々は動く。こちらの方がよほど人間的な温かみがあり、私は気に入っている。

折から、「自由と民主主義」を叫ぶ米英と外国軍、国際団体は、誰が敵やら分からず、おちおち地上を歩けない。空中だけを舞うヘリコプターが何やら象徴的で、哀れにも思えてきて、しかたなかった。

（医師・ペシャワール会現地代表）

主義主張より平和に暮らす方が重要なのだ。

地下水路を修復し、畑に緑が戻ったダラエ・ヌール渓谷＝2001年2月

「ペシャワールから沖縄へ」は毎月第4日曜日に掲載します。